

結核

第九卷 第六號 昭和六年六月二十四日發行

綜 說

外科の手術ノ肺結核ニ及ボス影響

(第九回日本結核病學會總會特別講演)

東大稻田內科助教授兼東京警察病院長

醫學博士 坂 口 康 藏

緒言

肺結核自個ニ對スル外科的療法ハ今日既ニ歐米各國ニ於テハ盛ニ行ハレテ居リ、今後益々隆盛タラントスル傾向ガ有ルガコレニ就テハ昨年本學會竝ニ外科學會ノ宿題報告トシテ石川教授ガ精細ナ講演ヲサレタ事デアルカラ、更ニ蛇足ヲ加フル必要ヲ認メナイ。唯話ノ順序上多少コノ點ニモ觸レルガ、本日余ノ講演ノ主眼トスル所ハ、肺結核患者ガ相當ニ大ナル何等カノ外科的手術ヲ受ケタ場合、コレガ肺結核ノ經過ニ對シ如何ナル影響ヲ及ボスカ、換言スレバ肺結核患者ニ對シ斯クノ如キ手術ヲ行フコトハ可及的避クルヲ以テ正道トナス可キデアルカ或ハ然ラザルカト云フコトデアアル。

肺結核ノ經過ガ患者ノ榮養狀態ニヨツテ尠ナカラザル影響ヲ受クルコトハ周知ノ事實デアツテ、今日コレヲ疑フノ餘地ハ無い。然ルニ外科的の手術ハ精神の不安、疼痛、手術後ニ於ケル多少ノ發熱、食思不振又ハ食物ノ制限等ノ爲メニ患者ノ榮養ヲ害スルモノデアツテ、手術後一時體重ノ減退ヲ見ル事ハ殆ンド必發ノ現象トモ稱ス可キデアアル。然リトスレバ

外科の手術ハソノ小ナルモノハ別トスルモ少シク大ナルモノハ當然肺結核ニ對シ多少惡影響ヲ與フ可キモノデアルカノ如ク想像セラル、ノデアアル。又臨牀上外科の手術ガ時トシテ肺結核ニ對シ惡影響ヲ及ボシタノデハ無イカト思ハル、場合ノ存在スルコトモ事實デアツテ、余自身モ痔瘻手術後急ニ肺結核症狀ガ増惡シ或ハ粟粒結核ヲ起シ、又從來潜伏性デアツタ肺結核ガ盲腸炎ノ手術後著明ニ活動ヲ初メタト思ハル、例及ビ一見結核腎摘出後ソノ爲メニ粟粒結核ヲ起シタカノ如ク見ユル例(事實ハ然ラザルモノニシテソノ詳細ハ後ニ述ブ可シ)等ヲ經驗シテ居ル。コレニ類似シタ例ニハ多數ノ臨牀家ガ遭遇サレテ居ルコト、思フ。斯クノ如ク外科の手術ハ推理上肺結核患者ニ有害ナル可キ筈デアリ、又他方ニハコレニ適合スルト思ハル、實例ノ存在スル關係上、今日デハ肺結核患者ニ對シ萬止ムヲ得ザル場合ノ他ハナル可ク手術ハ避クルヲ可トスト云フ見解ヲ持スル人ガ多イヤウニ思ハレル。

凡テ外科の手術ハソレニヨツテ疾病ニ基因スル患者ノ損害ヲ小ナラシメンガ爲メニ行ハル、モノデアアル以上、コレヲ行フ可キカ否カラ決定スルニハ、ソノ手術ニヨツテ得ベキ利益ト、又他面ニ於テ、ソノ爲ニ蒙ル損害トヲ互ニ比較シ、ソノ何レガ大ナルカニ從テ判斷ス可キモノデアアル。非肺結核患者ニ於テハ、コノ判斷ハ單ニ今日外科學ノ教フル所ニ從ヘバヨイノデアアルガ、肺結核患者ニ於テハソレ以外手術ノ肺結核經過ニ及ボス影響ヲ考慮ニ加ヘテバナラヌ爲メソノ關係ガ複雑ニナルノデアツテ、假リニ多數ノ人ノ考ヘテ居ル如ク、手術ハ一般ニ肺結核ノ經過ニ對シ有害ニ作用スルモノデアルトシテモ、ソノ有害ナル程度如何ト云フ量の關係ヲ明カニセテバ、手術ノ可否ヲ合理的ニ判斷シ得ナイワケデア。然ルニ從來コレニ關スル特別ナ研究ハ殆ンド無イト云フテモヨイノデアツテ、從テ今日醫家ガ外科的併發症ヲ起シタ肺結核患者ニ對シ可及的手術ヲ避クルノモ或ハ手術ヲ行フノモ、皆ソノ醫家個人ノ經驗ト見解トニ基ヅキ判斷シテ居ルノデアツテ、現代醫學ノ立場ニ於テハ斯ク爲ス可キデアルト云フ明確ナ標準ハ無イ。ソレガ爲メ同一患者ニ對スル態度ガ各醫家ニヨツテ異ナルコトガ珍ラシク無イト云フ現狀デアアル。

余ハ以前本問題ニ對シ、手術ハ單ニ患者ノ榮養ヲ害スルノミデ無ク、創面ニ生ジタル分泌物ハ吸收後恰モ身體ニ對シ異種蛋白質注射ノ如ク作用スルコトハ容易ニ想像セラル、ノミナラズ、動物實驗及ビ臨牀的觀察ニヨリ無菌の手術ハ血液

凝固時間及出血時間ノ短縮、赤血球沈降速度ノ増加、「フィブリノーゲン」ノ增量、血液粘稠度及表面稠力ノ増加等、異種蛋白質注射ニ際シテ見ラル、ト同一ノ變化ヲ生ズルモノナルコトヲ證明シタ學者モ存スルノデアアルカラ、肺結核患者中刺戟療法ヲ禁忌トナス可キモノニハ外科的手術モ有害デアラウト思ヒ、肺結核患者ニ對シ手術ノ有害ニ作用スル場合ハカナリ存在スル事ナラント考へ、患者ノ生命ニ對スル危險又ハ甚ダシキ苦痛ガ外科的所置以外ニコレヲ除去スル方法無キ場合ハ止ムヲ得ナイガ、然ラザル場合ニハ可及的の外科的手術ハ避ク可キモノデアルトノ見解ヲ持シテ居タノデアアル。然ルニ肺結核患者ニ止ムヲ得ズ種々ナル大手術ヲ行ヒ、ソノ前後ヲ詳細ニ觀察スルニ當ツテ、豫期シタ不良ノ影響ヲ毫モ認メ得ヌ場合ノ尠ナカラザル事ヲ經驗シ、又肺結核ノ治療法トシテ行ヒタル胸廓成形術ノ成績ガ同ジク肺ノ弛緩ト安靜トニヨツテ病竈ノ治癒ヲ促進スル人工氣胸術ニ比シ、前者ガ大ナル手術的攻撃ニヨリ患者ヲ弱クスルニ反シ、後者ハ毫モ患者ノ榮養ヲ害スル事無キニ係ハラズ、敢テ劣ラヌト云フ事實ヲ見ルニ及ンデ、果シテ外科的大手術ハ從來多クノ人ノ信ジタル如ク肺結核ニ對シ惡影響ヲ與フ可キモノナリヤ否ヤニ對シ疑ハザルニ至ツタノデアアル。

外科的大手術ハ常ニ患者ノ榮養ヲ害スルモノデアリ、又凡テ肺結核患者ノ榮養ヲ害スル事ハソノ經過ニ不良ナル影響ヲ與フルモノナル事ハ確實デアアルカラ、斯カル手術ガ肺結核患者ニ惡影響ヲ及ボス事モ敢テ疑フノ餘地ガ無イト信ジテ居ル人ハ今日少ナク無イヤウデアアルガ、コノ推論ハヨリ吟味シテ見ルト決シテ完全無缺ナモノトハ云ヘナイ。外科的手術ヲ行ツタ場合、上述ノ條件以外、他ニ何等肺結核ノ經過ヲ左右スル事情ガ加ハツテ來ナイ場合ニハ此ノ推理ハ正シイノデアアルガ然ラザル場合ニハ當然コノ結論ノ確實性ニハ動搖ヲ來タサチバナラヌノデアアル。

肺結核ノ治癒機轉ハ病竈ニ於ケル結締織ノ増殖ト竝行スルモノデアリ、又病竈ニ於ケル滲出物形成ノ多少ガ本病ノ經過ニ大ナル影響ヲ及ボスモノデアル事ハ周知ノ事實デアアル。從テ滲出物ノ發生及結締織ノ形成ニ影響スル事項ハ肺結核ノ經過ニ對シテモ亦影響ヲ與フ可キモノデアル事ハ想像ニ難ク無イ。一般ニ大ナル手術後ニハ「アチドージス」ヲ來タス傾向ノ存スルモノデアアルガ、Hernandsdofferノ研究ニヨレバ「アチドージス」ハ創傷ニ於ケル分泌ヲ抑制シ、肉芽發生及癩痕形成ヲ促進シ外傷ノ治癒ヲ佳良ナラシムルトノ事デアツテ、同氏ハコノ事實ヲ結核ノ治療上ニモ應用シテ居ル。同氏

ノコノ研究ニ對シテハ學者ニヨツテ贊否ソノ說ヲ異ニシ、Painl 等ノ如ク却テ「アルカリ」性反應ノ方ガ創傷ノ治癒ニ有利デアルト稱スルモノモアルガ、Hermannsdorferト同様ニ「アチドージス」ガ創傷ノ治癒ヲ促進スルト云フ實驗的成績乃至臨牀的所見ヲ得テ居ル學者モ少ナク無イ。又數年前 Lorin-Epstein ハ臨牀的經驗上反覆創傷ヲ受ケ或ハ骨折ヲ受ケタモノハ第一回ノ外傷ヨリモ良ク治癒スル事ヲ認メ、更ニ動物實驗ニヨツテコノ事實ヲ確メ、同氏ハ斯カル動物ノ血液中心ハ創傷ノ治癒ヲ促進スル物質ガ出現スルニ至ルモノト考ヘテ居ル。ソノ後 Frankel モ動物實驗ヲ行ヒ同様ノ事實ヲ認メコレヲ一種ノ「ホルモン」作用ニ歸シテ居ル。斯クノ如キ事實ガアルトスレバ、大ナル外傷即チ大ナル外科的手術ハ、一方ニ於テハ患者ノ榮養ヲ害スル關係上、肺結核ニ對シ不利ニ作用スルガ、他方ニ於テハ病竈ニ於ケル滲出物ヲ抑制シ結締織ノ増殖ヲ促シ有利ニ作用スル事ガ無イトモ限ラナイ。若シ斯クノ如キ有利ナ作用ガ存スル場合ニハ、コレト榮養障礙ニヨル不利ト何レガ大ナルカニヨツテ外科的手術ノ影響ガ決定セラル可キモノデアアル。今日ニ於テハ未ダ創傷ノ結核病竈ニ對スル有利ナル影響ハ決定的ノ事實トハ認メ難イガ、多數學者ノ研究ニヨリソノ可能性ガ存在スル以上コレヲ全ク無視スル事ハ穩當デ無イ。

斯ク觀察シ來タル時ハ外科的手術ガ肺結核ニ對シ有害ニ作用スルカ否カノ問題ハ今日猶ホ未解決デアルト爲スノガ正當デアアル。即チ吾人ハ肺結核患者ニ對シ外科的手術ノ必要ヲ生ジタル場合安心シテコレヲ行フ可キカ或ハ可及的コレヲ避ク可キカニ對シ確實ナ證據ヲ有セザルノデアアル。コノ問題ノ解決ガ實地臨牀家ニ取ツテ非常ニ必要ナコトハ申ス迄モ無イガ、問題ノ性質ガ直接多數患者ノ不幸ニ影響スルモノデアアル關係上、ソノ解決ニ對シテハ特別ニ慎重ナ態度ヲ取ルコトガ必要デアツテ、コレハ多數ノ臨牀的觀察及ビ多數ノ動物實驗ノ結果カラ徐ロニ結論ヲ下ス可キモノデ、強ヒテ急速ニコレヲ決定ス可キモノデハ無イ。然ルニ余ガ本問題ノ研究ニ手ヲツケタノハ極メテ最近デ、本日迄ニ自分デ満足シ得ル程ノ材料ヲ集ムルコトハ到底不可能ト信ジ、本講演ハ再三コレヲ辭退シタノデアアルガ、會長カラ本問題ノ解決ヲ促進スル意味ニ於テ豫報的ノコトデモヨイカラ話セト命ゼラレ、止ムヲ得ズ余ノ集メ得タダケノ材料ヲ基礎トシテ、外科的手術ガ肺結核ニ對シ有害ニ作用スル場合ガ多イカ、或ハ然ラザルカヲ述ブルニ止メントスルノデアツテ、何故ニ斯ク

ノ如キ結果ヲ生ズルカノ理由ニ關シテハコレヲ他日今少シク研究ノ進歩セル後ニ譲リ、今日ハ全クコレニハ觸レヌコトトスル。

余ハ本問題ヲ解決センガ爲メニハ、先ヅ多數ノ肺結核患者ニツキ、コレニ外科的手術ヲ行ツタ場合、ソレガ肺結核ノ經過ニ對シ如何ナル影響ヲ及ボスカヲ知り、次ニ既ニ結核ニハ感染シテ居ルガ、未ダ肺ニハ著明ナ活動性病變ヲ有シテ居ラヌモノガ、外科的手術ヲ受ケタ場合、ソレガ動機トナツテ著明ナ肺結核症狀ヲ呈スルニ至ルモノハドノ位アルカ、又肺結核患者ニ對シ胸廓成形術ノ如キ外科の大手術ヲ行ツテ病肺ノ弛緩ト安靜トヲ得セシメタ場合ト單純ナ人工氣胸術ニヨツテ同一ノ目的ヲ達シタ場合ノ治療成績トヲ比較シ、且ツ肺結核ノ經過ニ對シテ重要ナル關係ヲ有スル結核「アレルギー」ガ外科の大手術ニヨリ如何ナル影響ヲ受クルカヲ檢シ、尙ホ動物ノ實驗的結核ノ經過ガコレニ大ナル創傷ヲ加フルコトニヨツテ如何ナル變化ヲ呈スルニ至ルカヲ檢査シ、コレ等ノ諸事實ヲ綜合シテ考ヘレバ大體ニ於テ外科の手術ガ肺結核ニ對シ如何ナル影響ヲ與フルカヲ知り得ルナラント考ヘタノデアアル。コレ等ノ材料ハ東京市療養所長田澤博士及ビ東大泌尿科高橋教授ノ御好意ト兩博士門下ノ醫局員竝ビニ東大稻田内科及ビ東京警察病院ノ醫局員諸氏ノ御努力ニヨツテ集メ得タノデアツタ。茲ニ厚ク感謝ノ意ヲ表スル。ソノ他殊ニ恩師稻田先生ガ種々有益ナ御助言ヲ賜ハツタコト及ビ佐藤秀三教授ガ動物實驗ニ關シ御助言竝ニ結核菌ノ分與等種々便宜ヲ與ヘラレタコトニ對シ深く感謝スル次第デア

第一、肺結核患者ニ行ヒタル外科の手術ノ影響

肺結核症狀ノ既ニ顯著ナモノニ何等カノ外科の手術ヲ行ツタ場合、コレガ肺結核ノ經過ニ對シ如何ナル影響ヲ與フルモノデアアルカヲ知ルニハ、結核療養所ノ如ク多數ノ患者ヲ收容シテ居ル所デ、種々ナ併發症ノ爲手術ヲ受ケタモノニツキノ前後ノ状態ヲ比較スルガヨイト考ヘ、東京市療養所長田澤博士ノ快諾ヲ得テ同所ノ丸川及ビ池上兩學士ニソノ調査ヲ依頼シタ。ソノ成績ノ詳細ハ同氏等ヨリ本學會ニ於テ報告サレタ如クデアアルガ、ソノ大要ヲ述ブルコトニスル。私ガコノ調査ヲ依頼シタ後即チ昨年五月以來本年二月迄ニ丸川氏ガ自ラ手術ヲ行ツタ肺結核患者ハ三十一例デアアルガ、ソノ

中胸廓成形術、横隔膜神經捻除術等ノ如ク直接肺ノ呼吸運動ニ影響ヲ及ボスモノハ身體ニ創ヲツケタト云フコト以外ニ肺結核ノ經過ニ重大ナ影響ヲ及ボス條件ガ混入シテ來ルカラ、今茲デ問題ニシテ居ル一般ノ外科的手術ノ影響ヲ論ズルニ當ツテハコレヲ除外スルノガ正當ト考ヘ、ソノ中カラ呼吸運動ニ直接影響ヲ及ボサバルガ如キ種類ノ外科的手術ノ影響ノミヲ參考トスルコトニシタ。

第一表ハ手術ノ種類トコレガ患者ノ經過ニ及ボシタ影響トヲ示スモノデアアルガ十三例中八例即約三分ノ二ハ無影響デ殘リ五例中三例ハ輕快、二例ハ増惡ヲ示シテ居ル。又肺結核ノ個々ノ症狀ニ對スル手術ノ影響モ第二表ニ示セルガ如ク、大多數ハ不變、デソノ他ノ少數ハ種々ナ成績ヲ呈シテ居ル。

第一表

合計	ノモルア響影			無響影ニ用作用呼吸ノモキ						手術ノ種類	例數	輕快	不變	増惡	直接死亡
	計	膿胸手術	胸廓成形術 横隔膜神經捻除術	計	腸管吻合術	鼠蹊ヘルニア根治手術	辜丸摘出	頸部淋巴腺摘出	痔瘻手術						
三一	一八	二	一三	一三	一	一	三	一	五	二					
	五	〇	三	三	〇	〇	二	〇	一	〇					
	八	一	七	八	〇	〇	一	一	四	二					
	四	一	三	二	一	一	〇	〇	〇	〇					
															一

第二表

合計	手術後ノ狀態		局所熱		咳嗽咯痰菌量榮養	
	増惡セルモノ	一時増惡シ後術前ヨリモ輕快セルモノ	一時増惡シ後術前ノ狀態ニ復シタルモノ	不變ナルモノ	輕快セルモノ	一時的ニ輕快シ後増惡又ハ術前ノ狀態ニ復セルモノ
一三	一	二	六	二	三	一
一三					七	一
一三					四	一
一三					一〇	
一三					四	不明
一三					二	二

以上ノ十三例ハ數ハ少ナイガ特ニコノ目的ノ爲ニ臨牀上注意シテ調査サレタモノデアアル。
 丸川學士ハ更ニ昭和二年ヨリ同五年ニ至ル迄ノ間ニ同療養所ニ於テ種々ナル手術ヲ受ケタ一四〇名ノ肺結核患者ノ病

歴ニ就テ調査シタ。同氏ハ手術直後肺結核トハ無關係ニ一般手術患者ニ來タル現象トシテ見ラル、發熱ヲ計算外ニ置キソノ經過シタ後短期間内及ビ三—六ヶ月ヲ經過シタ後ノ症狀ト比較シ良、不變、不良ノ三種類ニ分類シコレヲ本學會デ報告サレタガ、ソノ中カラ前述ノ理由ニヨリ、直接肺ノ呼吸運動ニ影響ヲ及ボス手術ヲ除外シタ一一二例ニ就テノ成績ハ第二表ニ示セルガ如クデアアル。

第三表

手術ノ種類	例數	手術後短期間ノ病狀		三—六ヶ月後病狀	
		良	不變 不良	良	不變 不良
開腹術	一六	三	九	四	六
痔	四八	六	三九	八	二七
結核性副睾丸炎	一七	一	一六	一	一四
下肢切斷	四	〇	四	一	一
鼠蹊「ヘルニア」	三	〇	三	〇	二
結核性頸腺炎	五	一	四	〇	五
肋骨「カリエス」	四	一	三	〇	三
其他	一五	一	八	〇	七
合計	一一二	一三	八六	一四	六四
第一期患者	八名			一四	三四
第二期患者	二六名			六	四
第三期患者	七八名			〇	一

生存セルモノハ約半數(五三%)ニ過ギナイ。コノ事實ト療養所患者ノ死亡率ガ前述ノ如ク高イコトヲ合セ考ヘレバ入所中ノ第三期患者中ニハ時日ノ經過ト共ニ手術ノ有無ニ關セズ漸次病勢ノ増悪スルモノガカナリ多數ニアルト考ヘテバナラス。然リトスレバ表中手術後短時日間ハ不變ナリシモノガ三—六ヶ月後ニ増悪ヲ示スニ至ツタモノガアルコトハ當然ノコトデアツテ、コレヲ以テ手術ノ惡影響ガ遅クナツテ現ハレタトナス可キデハ無イ。又自然的ニハ増悪ス可キモノガ手術ノ爲メ好影響ヲ受ケテ不變ノ状態トナリ或ハ反對ニ自然的ニハ輕快ス可キモノガ手術ノ爲メ惡影響ヲ受ケ不變ノ部

コノ成績ヲ材料トシテ手術ノ影響ヲ考フルニ當リ注意ス可キコトハ肺結核患者ハ長時日ノ間ニハ例ヘ外科的手術ヲ加ヘザル場合ニ於テモ、ソノ病狀ノ變化即チ輕快若シクハ増悪ガ甚ダ屢々起リ得ルコトデアツテ、從テ表中ニ示サレタル良又ハ不良ノ經過ヲ以テ直ニ手術ノ結果トサス可カラザルコトハ云フ迄モ無イ。現今療養所ニ入所スルモノニハ重症患者ガ多ク、一年間ニ於ケル死亡數ハソノ入所患者數ニ對シ六〇—七〇%ニ達シテ居ル狀況デアリ、從テ上記手術ヲ受ケタモノモ表中ニ示シタ如ク大部分ハ所謂第三期患者デアアル。然ルニ〇ch.ガソノ病院ヲ退院シタ第三期患者ニツキ調査シタ所ニヨレバ一年後ニ

ニ入ツタモノモ無イトハ限ラナイカラ、第三表ハ決シテ何名ガ手術ノ爲メ好影響若シクハ惡影響ヲ受ケ或ハ全ク無影響デアツタト云フコトヲ示スモノデハ無イ。唯吾人ガ本表カラ知り得ル確實ナル事實ハソノ大多數ガ不變ノ部ニ屬シ、且ツ不良トシテ擧ゲラレテ居ルモノ、中ニモ既述ノ如ク手術ガ何等惡影響ヲ及ボサナカツタモノモ存スルノデアルカラ、外科的手術ハ肺結核患者ニ對シ惡影響ヲ及ボサヌノガ普通デアルト云フコトデアアル。

上述ノ如ク肺結核患者ニ對シ手術ヲ行ツタ場合ノ影響ハ少數例ニツキ精細ニ觀察シタモノニ於テモ多數例ノ病歴ニツキ検査シタ所モソノ成績ガ全ク一致シ手術ガ直接肺結核ノ經過ニ對シ惡影響ヲ及ボスコトハ一般ニ考ヘラレテ居ルガ如ク多イモノデハ無ク寧ろ稀ナモノデアルト云フ可キデアアル。

第二、痔瘻及肛門周圍膿瘍手術ノ肺結核ニ及ボス影響

從來本邦ノ民間ニ於テハ痔瘻ノ手術ヲ行フ時ハ肺結核ヲ誘起スルト稱シ恐怖シテ居ル。元來痔瘻及肛門周圍炎ノ中ニハ結核性ノモノガ少ナク無イカラ、斯カル疾患ヲ有スルモノガ他日身體ノ他部ニモ結核性疾患ヲ惹起スルコトノ珍ラシカラザルコトハ當然デアアル。斯カル患者ガ以前手術ヲ受ケタコトガアル場合、ソノ間隔ノ大小ヲ問ハズ凡テ兩者間ニ因果關係ノ存スルモノト曲解スル關係上、前述ノ如キ考ヘガ民間ニ擴ガツタノデアアルカ、或ハ實際多少ナリトモコノ考ヘノ發生ヲ肯定ス可キ事實ガ存在スルノデアアルカニ關シテハ一應調査ヲ行ヒ本問題ノ真相ヲ明カニナシ置クコトハ實地臨牀上必要ノコトデアアル。然シ余ノ寡聞今日迄コノ點ニ關シ詳細ナル報告ヲナシタモノアルコトヲ知ラヌ。依テ余ハ警察病院デ手術ヲ受ケタ八十九名ノ痔瘻及ビ七名ノ肛門周圍膿瘍患者合計九十六名ニ就テ自ラソノ調査ヲ行ツタ所ソノ中十四名ハ住所ガ不明トナツタ爲メ又ハ問合セテニ對シ調査打切り迄ニ返信無キ爲ニソノ後ノ状態ガ不明デアアルガ、手術後今日迄ノ經過明瞭ナル八十二名ニ就テハ第四表ニ示スガ如キ成績ヲ得タ。

手術前カラ肺結核ヲ有シテ居タ十四例中、手術後肺結核ノ診斷ガ明カトナツタモノガ三例アル。ソノ二例ハ手術ノ前後ニ於テ自覺的竝ニ他覺的凡テノ症狀ニ於テ何等ノ變化モ無カツタノデアアルガ、手術後始メテ喀痰ヲ検査サレ、結核菌ガ證明サレタノデアアル。又他ノ一名ハ手術前カナリ以前カラ發熱シテ居タガ手術後別ニ特別ナ變化モ無ク、三ヶ月半ヲ經

第四表

合	非肺結核患者	肺結核患者	無影響	肺結核症狀出現又ハ増悪	二ヶ月以上経過後増悪又ハ發病	合計
		手術前診斷確定者 手術後診斷確定者				
計	肋膜炎兼結核性腹膜炎他ニ異常無キモノ	二九	七五例	二(一例ハ粟粒性結核)	二(一例ハ約九ヶ月)(三ヶ月半)	八二例
	六三一	〇〇	二例			五例
						六八例

シタト思ハル、モノハ一例モ無イ。

次ニ肋膜炎兼慢性腹膜炎ノ恢復期ニ手術ヲ行ツタモノガ一例アルガ、コレハ無影響デアッタ。又手術前ニハ痔瘻或ハ肛門周圍炎以外ニハ特別ノ疾患ヲ認メナカッタ六七例中一名ハ手術後高熱ヲ來タスト共ニ肺結核症狀ガ著明ニ現ハレ、二乃至二ヶ月後ニ至リ漸ク良好ノ經過ヲ取ルニ至ツタ。他ノ一名ハ手術後間モ無ク粟粒結核ヲ起シタ、然シ手術前コレガ起ツテ居ナカッタト云フ確證ハ無イ。ソノ他二ヶ月後ニ結核性腹膜炎ヲ起シタモノガ一名ト四ヶ月後ニ肋膜炎ヲ起シタモノガ一名トアルガ、コノ二例ニ於ケル發病ハ手術トハ無關係ト思ハレル。残り六二名ハ手術後ソノ直接影響トシテ一乃至二日乃至數日間多少ノ發熱ヲ來タシタト云フ以外ニハソノ後何等ノ變化モ無ク今日皆壯健デ活動シテ居ル。

以上ノ成績ヲ總括スレバ肺結核患者十四名中手術ノ爲メニ増悪ヲ來タシト思ハル、モノハ一名モ無イ。手術前肺結核ヲ有シナカッタ六十八名中一名ハ手術後肺結核、一名ハ粟粒結核ヲ起シテ居ルガ、残り六十六名ハ手術ノ爲メニ何等ノ疾患ヲモ續發シテ居ラス。唯ソノ中手術後二ヶ月以上経過シテカラ肋膜炎及ビ結核性腹膜炎ヲ起シタモノガ各一例アリ、肺結核患者中ニモ手術後三乃至四ヶ月以上ヲ経過シテカラ始メテ増悪ヲ示シタモノガ三例アルガ、コレ等ハ手術トハ無關係ト認ム可キデアアル。又肺結核患者中手術自己ハ無影響デアッタガ、手術後始メテ喀痰ノ検査ニヨリ診斷ノ明カトナツタモノガ二例アル。

過シテカラ突然多量ニ喀血シソノ後急ニ増悪シタノデアツテ、コレハ手術トハ無論關係ガ無イ。手術前既ニ肺結核ノ診斷ノ確定サレテ居タ十一例中九例ニ於テハ全ク無影響二例ハ四ヶ月乃至九ヶ月間無影響デアツテ、ソノ後ニ至リ始メテ増悪シタノデコレハ手術トハ無關係ト認ム可キデアアル。要スルニ手術前カラ肺結核ノアツタ十四例中手術ノ爲ニ病勢ガ増悪

コレニヨツテ見ルトコノ手術ノ爲メニ肺結核ノ發病ヲ促シ若シクハソノ増悪ヲ來タスコトハ例外デアツテ、通例ハ無影響デアルト稱ス可キデアル。又コノ手術後相當ノ期間ヲ經過シテカラ肺結核、肋膜炎又ハ結核性腹膜炎ヲ起スモノモサホド多クナイ。但シコレハ手術後年月ヲ久シク經過スルニ從ヒ漸次多少増加ス可キコトハ當然デアル。即チ八十二例中手術ガ惡影響ヲ及ボシタカト思ハレルモノハ二例デ、コレニ實際ハ無影響ナノデアルガ、手術後肺結核ノ診斷ガ確定サレ或ハ二―三ヶ月以上經過シテ發病又ハ増悪シタ爲患者若シクハソノ家族カラ手術ガ惡影響ヲ及ボシタト誤解サレル可能性ノアル六例ヲ加ヘテモ、惡評ノ原因トナリ得ベキモノハ僅カニ八例デ意外ニ少ナイノデアル。即チ痔瘻手術ガ肺結核ノ發生ヲ促シ又ハコレヲ増悪セシムルトノ民間ノ風説ニ對シテハ何等事實の根據ヲ認ムルコトハ出來ナイ。

以上ノ成績ハ多數ノ非肺結核患者及ビ少數ノアマリ重症ナラザル肺結核患者ニ就テ得タモノデアル。丸川學士ガ東京市療養所ノ患者ニ就テ得タ成績ニヨレバ輕症肺結核患者デハ手術ノ前後ニ於テソノ病狀ニ變化ヲ示サヌモノガ多ク、コノ點ハ余ノ調査ト一致シテ居ルガ、重症患者デハ手術後一定時日ヲ經過シテカラノ病狀ハ手術前ニ比シテ不良トナルモノガ少ナカラストノ結果ヲ得テ居ル。但シ既ニ述ベタ如ク重症患者ハ時日ノ經過ト共ニ漸次病勢ノ進行ヲ示スコトガ多イノデアルカラ、コレハ直ニ痔瘻手術ガ有害ダトノ意味ニナラヌコトハ申ス迄モ無イ。

要スルニ余ノ調査成績ト丸川氏ノ成績トヲ併セ考ヘレバ、痔瘻手術ニヨツテ肺結核ノ誘發サル、コトハ決シテ世人ノ考ヘテ居ル如ク屢々存スルモノデハ無ク、寧ロ例外ニ屬スル稀ナコト、云フ可キデアリ、又輕症患者ニ對シテハ本手術ガ無害ナルコトモ亦斷言シ得ル事ト思フ。重症患者ニ對シテハ特別ノ苦痛存在シ、手術ニヨツテコレヲ除去シ得ル場合ニハ勿論手術ヲ行フ可キデアルガ、然ラザル場合ニハ好ンデ手術ヲ行フ必要ハ無イ。

第三、結核腎摘出手術ノ肺結核ニ及ボス影響

腎臟若シクハソノ他ノ場所、例ヘバ關節等ニ高度ノ結核性病變ガ存在スル場合、外科的ニコノ病竈ヲ除去スレバ、ソノ身體ニ及ボス惡影響ガ消失スル結果トシテ、コノ手術ハ健康上有利ニ作用シ、往々既存ノ肺結核ニ對シ好影響ヲ及ボスコトガアルトハ古クカラ唱ヘラレ成書ニモ記サレテ居ル所デアル。即チ結核腎摘出ハ身體ニ及ボス手術的侵害ノ惡影響

ト結核病竈消失ノ好影響ト二ツノ作用ノ合同シタモノデアラカラ、ソノ成績ヲ判斷スルニ當ツテモ、コノ事實ヲ念頭ニ置ク必要ハアルガ、兎ニ角多數ノ例ニツキ、本手術ノ爲メ肺結核ノ誘發セラル、モノガ有ルカ否カ、及既存ノ肺結核ガコノ手術ニヨツテ如何ナル影響ヲ受クルカヲ検査セント欲シ、東大泌尿科デ高橋教授ガ本手術ヲ行フ前後ニ於テ、患者ノ胸部ヲ打診、聽診竝ニレントゲン診査ヲ行ヒ、ソノ變化ノ有無ヲ檢シ、又肺結核患者ニ對シテハ熱、咳嗽、喀痰及喀痰中ノ菌量等ニ注意シタノデアアル。コノ検査ハ泌尿科ノ阿久津、小關兩氏及東大稻田内科ノ寺嶋學士ガ擔任シタノデアツテ、ソノ詳細ハ同氏等ガ本年ノ泌尿器學會ニ於テ發表シタガ、ソノ大體ノ成績ハ第五表及第六表ニ示スガ如クデア

第五表

手術前	例數	手術後肺所見	例數
(イ) 肺所見陰性又ハ肺變アルモノ (ロ) 粟粒結核	二九 一	不變 活動性肺結核トナリタルモノ 増悪 増悪 不變 輕快 一時増悪後輕快	二九 〇 一 二 三 一
(ハ) 活動性肺結核	七		一

第六表

手術後	發熱	咳嗽	喀痰	喀痰中菌數	體重
一時増悪後復舊セル例數	一	一	一	一	一
一時増悪後却テ輕快	三	二	一	一	四
持續的ニ増悪	二	四	五	三	三
不變	二	一	一	一	一
良好トナレルモノ	二	一	一	一	一

綜 說 坂口ニ外科の手術ノ肺結核ニ及ボス影響

患者ノ大多數ニハレントゲン診査ニヨリ古キ非活動性ノ病變ヲ多少認メタガ、斯カルモノ及ビ肺所見ノ陰性デアツタモノカラハ一例モ手術後活動性肺結核ヲ發生シナカツタ。唯一例手術後間モ無ク頭痛及多少ノ嘔氣ヲ起シ來タリ約一ヶ月後腦膜炎ノ症狀ガ著明トナリ、手術後四十五日ニ死亡シタモノガアツテ、一見手術ノ爲ニ腦膜炎ヲ起シタカノヤウニ思ハレタガ手術ノ前日撮影シタレントゲン寫眞ニハ立派ナ粟粒結核ノ像ガ既ニ現ハレテ居タ。腎摘出術ニヨル死亡率ハ以前ニハカナリ多ク、ソノ原因トシテハ尿毒症ガ多カツタガ、手術前ニ腎臟機能檢査ガ精密ニ行ハル、ヤウニナツテカラハ死亡率モ著シク減少シタ。近時本手術後ノ死因トシテハ心臟衰弱肺炎「エンボリー」等種々ノモノガ擧ゲラレテ居ルガ、殊ニ注目ス可キハ粟粒結核及結核性腦膜

炎ガ比較的多イト云ハレテ居ルコトデアアル。Kummel ハ手術後六ヶ月以内ノ死因ハ多クハ粟粒結核及結核性腦膜炎デア
ルト云ヒ、Israel ハ六ヶ月以内ニ於ケル死亡例ノ二一・四%ハコレニヨルト云フテ居ル。臨牀上結核性腦膜炎ノ診斷ヲ附
セラレタモノ、多數ニ於テハ剖檢上粟粒結核ヲ認メルモノデアアルガ、前述ノ如キ次第デアルトスレバ本手術ト粟粒結核
發生トノ間ニ何等カノ關係ガ存在スルコトヲ直ニ否定スルコトモ困難デアアルガ、粟粒結核ハコレガ起ツテモ、初メノ間ハ
唯熱ガアルノミデカナリノ時日ヲ經過シテカラ腦膜炎又ハソノ他ノ症狀ヲ現ハスニ至ルコトモ少ナク無イカラ、腎臟結
核ノ如キ元來熱ヲ出スコトノアル疾患デハ吾人ノ實例ニ於ケルガ如ク、手術前既ニ發生シテ居タモノヲ手術後ニ起ツタ
ト誤認スル場合ガ必ズ他ニモアルコト、考ヘル。故ニ嚴格ニ云ヘバコノ手術ノ爲ニ粟粒結核又ハ腦膜炎ガ起ツタト云フ
ニハ、手術ノ少シ前ニレントゲン寫眞ヲ撮リソノ際粟粒結核ガ起ツテ居ナイト云フコトガ確メラレテ居ラチバソノ決論
ハ確實デハ無イ。コレハ單ニ腎摘出術ノ場合ニ限ラズ他ノ手術ニ於テモソノ關係ハ同一デアアル。

以上ノ他、手術前既ニ活動性ノ肺結核症狀ヲ呈シテ居タモノガ七例アルガ、ソノ中二例ハ手術後一般症狀ガ増悪シテ死
亡シタ。然シ何レモ他側ノ腎臟ガ既ニ侵サレテ居リ、ソノ一例ニハ腸結核モアツタ。後者ハ手術後一時全身症狀モ肺所
見モ悪クナツタガ、間モ無ク却テ手術前ヨリモ幾分カ輕快シ、ソノ後更ニ増悪ヲ來タシ手術後四十九日目ニ死亡シタノ
デアアル。他ノ一例ハ手術前カラ高熱ガアリ榮養モ悪カツタガ手術後同様ノ状態ガ續キ、唯手術後第三十六日目ニ少シ喀
血シタガ肺所見ニハ格別手術前ト著シキ差異ヲ認メ得ナカツタ、然シ手術前カラアツタ衰弱ノ進行ガ停止セズ遂ニ手術
後八十七日目ニ死亡シタ。コノ二例ハ手術前カラ漸次衰弱ガ強クナリ、手術ヲセンデモノノ死期ハアマリ遠ク無イト思
ハレタモノデアツテ、手術ノ爲メ多少死期ガ早メラレタカ否カハ不明デアアルガ、何レニシテモ手術後特ニ目立ツテ病勢
ガ増悪シタト云フ狀況ハ認メラレナカツタノデアアル。

肺結核ヲ有スル患者ニ手術ヲ行ツタ場合、手術後ニ於ケル發熱、咳嗽、喀痰及ソノ中ノ菌數等ヲ注意シテ觀察スル
ト、手術ニヨツテ影響ヲ蒙ラヌモノガ最モ多ク、コレニ次デハ手術後一時發熱及咳嗽ガ強クナリ、後却テ手術前ヨリモ
減退スルモノガ多イ。手術後一時發熱及咳嗽ノ強クナルコトハ肺結核患者ニ種々ナ手術ヲスル時屢々見ラレル現象デ

アル。

以上ノ成績ニヨレバ腎臟摘出術ノ爲メ肺結核ガ特ニ輕快スルコトガ多イトハ考ヘラレナイガ、明カニ増悪スルコトモ稀デアツテ、大體ニ於テハ無影響ナルコトガ普通デアアル。又コノ手術ノ爲メニ從來肺結核ノ無カツタモノニ新タニ肺結核ヲ起スト云フヤウナコトハ殆ンド無ク、萬一斯カル場合ガ有ツタトスレバコレハ偶然ノ出來事ト考ヘテ差支無イ。

第四、胸廓成形術ノ肺結核患者ニ及ボス影響

今日歐米各國ニ於テハ胸廓成形術ガ適當ノ條件ヲ備ヘタ肺結核患者ニ對シテハ盛ニ行ハレ、我々ノ所デモコレヲ實行シ良好ナ成績ヲ得テ居ル。從來ノ報告中外國及本邦ニ於ケル主タルモノヲ表示スレバ第七表ノ如クデアアル。

第七表

報告者	手術者	手術例數	輕快	著シク輕快(無菌)	全治	以上合計	不變	増惡	早期死亡	晚期死亡
Sauerbruch	一九二五迄	一九一五年乃至二七年	六四六	一七・五	四二・四	五九・九	三・三	〇・九	一三・三	一六・七
Alexander	一九一八年乃至二三年	世界ノ文獻	一〇二四	二六・一	三二・二	五八・三	三・六	一・八	一三・〇	一〇・九
Bull	一九三〇年迄	諾威諸家	四〇一	二〇	三五・四〇	五五・一六〇	一		一一	
石川	一九三〇年迄	報告者	三〇	二二・三	三三・三	五六・六	未治	六・七	(一名) 三・三	三三・三
土井	一九三一年迄	報告者	一四	二一・五	五〇・〇	七一・五		一四・三	(一名) 七・一	七・一

即本手術ニヨリ治癒若シクハ輕快スルモノ、率ハ約五五乃至七〇%デアアル(上表中石川教授ノ成績ハ昨年學會デ發表サレタモノデ、同氏ヨリノ私信ニヨレバ、ソノ後手術例ヲ加ヘタモノ、治癒率ハ一層良好トナリ、早期死亡率モ減少シタトノコトデアアル)。然ノミナラズ Sauerbruch ハ一側ノ

硬化性肺結核ニ對シテハ六〇乃至七〇%ノ治癒又ハ八〇%迄ノ臨牀的健康状態ヲ得ルコトガ出來ルト稱シテ居ル。Oeri ガ Glarner Heilstätte ヲ退院シタ第三期肺結核患者ニ就テ調査シタ所ニヨレバ、ソノ生存率ハ一年後ニハ五三%、二年後ニハ四〇%、五年後ニハ二二%デアツタガ、Sauerbruch ハ斯カル患者ノ一〇%ヲ手術ニヨツテ無菌トナシ、一六%ヲ

綜 說 坂口外科の手術ノ肺結核ニ及ボス影響

著シク輕快セシメ得ルト稱シテ居ル。

斯クノ如ク胸廓成形術ノ治療成績ハ甚ダ良好デアリ、又コノ手術ハ外科醫ニ取リテハ技術上簡單ナモノトノコトデアアルガ、皮膚筋肉層ヲ通ジテ大ナル切開ヲ加ヘ多數ノ肋骨ヲ切除スルノデアルカラ、患者ニ取ツテハ大手術デアアル。從テ強ク衰弱シテ居ルモノ等ハソノ手術ニ耐ヘズ手術後間モ無ク死亡スルモノモ存スルノデアアツテ、手術後數週間以內ニ死亡スル所謂早期死亡率ハ約十%内外デアアル。然シコレハ手術ノ巧拙ヨリモ寧ロ適應症ノ選擇如何ニヨルノデアアツテ Tiedel ノ如キハ八五例中僅カニ一例ノ早期死亡ヲ經驗シタニ過ギヌト報告シ、又 Archbald ハ適應症ノ良好デアツタモノニ於テハ四・二%ソノ疑ハシキモノニ於テハ六・六%、不適當ト思ハレタモノニ手術シタモノデハ四〇%ノ早期死亡率ト云フ如ク、適應症ノ可否ニヨツテ著シキ差異ヲ見テ居ル。警察病院デ土井博士ノ行ツタ一四例ノ本手術中一例ノ早期死亡者ヲ出シテ居ルガ、コレハ手術ノ成績ガ良好ナノニ釣リ込マレ私ガ少シ調子ニ乘リ過ギテ、今カラ考ヘレバ甚ダ無理ナ患者ヲ手術サセタノデアツテ、充分注意シテ適應症ヲ選ベバ、コノ死亡率ハモツト著シク減ズルコトガ出來ルト考ヘル。然シ兎ニ角コノ手術ハ大手術デアルカラ、コレニ耐ヘタモノモ、手術後ニハ一時體重ノ減少ヲ來タスノガ常デアアル。斯クノ如ク胸廓成形術ハ患者ノ榮養ヲ害スルモノデアルカラ、若シコノ手術ノ有效ナ原因ガ單ニ胸廓ノ縮小ニヨリ肺ノ弛緩ト安靜ヲ來サシムルト云フコトニ存スルナラバ、患者ノ榮養ヲ毫モ害スルコト無クシテ同一目的ヲ達スル人工氣胸術ノ方ガ遙カニ有利ナル可キ筈デアアル。然シ事實ハ果シテ如何デアルカ、コノ兩者ヲ比較スルコトハ興味アルコト、思フ。人工氣胸術ノ成績ハ患者ノ經濟狀態ニヨツテ著シク異ナルノデアアツテ、外國ノ統計ニヨレバ比較的社會的地位ノヨイモノニ於テハ良好ナ治療成績ヲ得タモノガ五〇乃至九二%ト云フ非常ニヨイ成績デアアルガ貧困ナモノニ於テハ一八乃至四二%ト云フ遙カニ惡イ成績デアアル。氣胸療法ハ元來長日月間コレヲ持續セテバ充分ナル效果ヲ得難イモノデアアルガ貧困者デハソノ間空氣ノ後充填ガ理想通りニ行ハレヌコトモ屢々アリ、且ツ食物、住居等モ不良デアアル爲メ斯カル差異ヲ呈スルコト、思ハレル。ソノ他人工氣胸術ノ成績ハ早期浸潤及早期空洞ニ於テハ甚ダ良好デアツテ、コレト他型ノ肺結核トノ間ニハソノ治療成績ニ著シキ差異ガアル。元來早期浸潤及早期空洞ハ比較的治療傾向ノ大ナルモノデ斯カルモノニ對

シテハ胸廓成形術ヲ行フ必要ハ無イ。從テ人工氣胸術ト胸廓成形術ノ成績ヲ比較スルニハ早期浸潤ト早期空洞ヲ除外シタモノニ就テ比較ス可キデアル。

本邦ニ於ケル人工氣胸療法治療成績ノ代表トシテ東北大學ノ熊谷教授、北大ノ有馬教授、阪大ノ今村教授ノ所デ行ハレタモノヲ選ビコレニ東大稻田内科ノ成績ヲ加ヘテ表示スレバ第八表ノ如クデアル。

第八表

A 早期浸潤及早期空洞ヲ除外セルモノ
 B ハ右兩者ヲ含ムモノ
 C ハ右兩者ノミ

科	稲田内			今村肺癆科			内科馬			熊谷内科			例數	治癒%	輕快%	以上兩者ノ合計%	不變%	増悪及死亡%
	C	B	A	C	B	A	C	B	A	C	B	A						
	一三	六〇	四七	一四	一一	一〇	一六	八八	七二	五六	一六七	一三一	五	一四・四	三七・七	五二・一	二六・三	二一・六
					一九	一五		四・八	八・三	三九・三	三六・七	一四・四			四五・〇	八一・七	一三・〇	五・三
								四三・八	三六・一	五一・八	四五・〇	三七・七			五二・一	九一・一	八・九	〇・〇
	八五	五五	四七	七一	六一	五八	六八・八	四八・九	四四・四	九一・一	八一・七	五二・一			五二・一	二六・三	二一・六	二一・六
	七・五	一・八	二・一	二九	二四	二四	一八・七	二三・八	二五・〇	八・九	一三・〇	二六・三			二六・三	二・一	二・一	二・一
	七・五	一・六	三・二	〇	一五	一八	一二・五	二七・三	三〇・六	〇・〇	五・三	二一・六			二一・六	二・一	二・一	二・一

早期浸潤及早期空洞ヲ除外シタモノニ對シ人工氣胸術ニヨツテ好成績ヲ得タモノハ、熊谷内科デハ五二%、有馬内科デハ四四%、今村教授ノ所デハ五八%、東大稻田内科デハ四七%即チコレヲ總括スレバ四四乃至五八%デアル。コレヲ胸廓成形術ノ五五乃至七一%ニ比較スレバ明カニ後者ノ方ガ良好デアルト云ハチバナラス。一般ニ胸廓成形術ハ人工氣胸術ヨリモ重症ナ患者ニ對シテ行フノデアルカラ、ソノ治療效果ガ同一デアル場合ニハ當然人工氣胸術ノ方ガ良好ナ結果ヲ示ス可キデア。然ルニ上述ノ如ク反對ノ成績ヲ呈スルコトハ兩者間ニ相當大ナル差異ノ存スルコトヲ意味スルモノデアル。胸廓成形術ハ一時患者ノ衰弱ヲ増シ、又身體ノ衰弱ハ肺結核ニ對シテ惡影響ヲ與フ

ルコトハ確實デアアルカラ、上述ノ事實ハ胸廓成形術ガ榮養ノ減退ニヨル不利ヲ補ヒテ猶ホ餘リアル有利ナ作用ヲ有スルモノト考ヘチバナラス。コノ有利ナ點ガ何デアアルカニ關スル余ノ見解ハ他ノ機會ニ於テ述ブルコト、シ茲ニハ省略ス

胸廓成形術後ニハ體重ノ減少ヲ來タスノミデ無ク、一時喀痰及咳嗽モ増加スルコトガ多イガ、間モ無ク下熱シ、喀痰ノ量モ却テ手術前ヨリハ減少スルニ至リ、ソノ性状モ變化シ、膿性ノ所ガ少ナクナリ、漸次粘液性トナリ、咳嗽モ減ジ、喀痰中ノ菌數モ減少シ、遂ニハ全ク無菌トナルモノモ決シテ少ナクナイ。

人工氣胸術ハ充分ナ效果ヲ得ル爲メニハコレヲ長時日間持續スルコトガ必要デアルガ、ソノ間怠ラズ反覆空氣ヲ入レルコトハ往々種々ノ事情ニヨツテ妨ゲラレ實行サレヌ場合ガアル。然ルニ胸廓成形術ニ於テハ手術創サヘ治癒スレバソノ後ニハ特別ノ治療ヲ要シナイノデアツテ、ソノ治療期間ヲ著シク短縮シ得ルコトハ非常ニ有利ナ點デアアル。

斯クノ如ク胸廓成形術ハ單ニソノ治療成績ガヨイノミデ無ク、治療期間モ短カクテヨイト云フ利益ガアルカラ、今後本療法ハ本邦ニ於テモ歐米ニ於ケルト同様漸次盛ニ行ハル、ニ至ルコト、思ハレル。本療法ハソノ適應症ノ撰擇ニ注意シ且ツ手術ヲ二回ニ分チテ行フヤウニスレバ手術ノ爲ニ死亡スルト云フ危險ハ甚ダ少ナイト思フ。但シ本療法ノ成績ノ良否ハ主トシテ適應症ノ撰擇如何ニヨルモノデアルカラ、コノ撰擇ニハ細心ノ注意ヲ要スルノデアツテ、コレハ肺結核ニ經驗深キ内科醫ニ委ス可キデアアル。如何ニ肺結核ニ興味ニ有スル外科醫デモ到底専門的經驗ヲ有スル内科醫ニハ遙カニ及バヌノデアルカラ、外科醫ガ自ラ適應症ヲ定ムルコトハ正當デ無ク、Sauerbruchノ如キ豊富ナ經驗ヲ有スル外科醫デモ必ズ内科醫ノ意見ヲ徵シタ上デ手術ノ可否ヲ決定シテ居ルトノコトデアアル。獨逸デハ結核専門醫中自分デ手術ヲ行フモノモアリ、Sauerbruchハソノ弊害ヲ擧ゲテ強クコレニ反對シテ居ルガ、余モコレハ外科醫ニ頼ム可キデアルト考ヘル。即チ本療法ハ内外科醫ガ特ニ密接ニ協力シテ行ヒ始メテ充分ナル效果ヲ得ベキモノデアアル。

第五、外科の大手術ノ結核「アレルギー」ニ及ボス影響

肺結核ノ經過ガ身體ノ結核ニ對スル免疫性ト過敏性ニヨツテ左右セラル、モノデアアルコトハ今日一般學者ノ認ムル所デアツテ、本病ノ經過ヲ考究スルニ當テハ結核「アレルギー」ノ状態如何ハコレヲ度外視ス可カラザルモノデアアル。故ニ外科の大手術ニヨツテ「アレルギー」ニ認ム可キ變化ヲ來スカ否カラ知ルコトハ斯カル手術ガ肺結核ノ經過ニ影響ヲ與フルカ

否カラ判斷スル上ニ多大ノ參考トナルト考ヘタノデ、警察病院ニ於テ種々ナル大手術ヲ行ツタ患者ニツキノ前後ニ於テ Mantoux 反應ヲ行ツタ。未ダソノ症例ガ少ナイノデ斷定的ノ事ヲ述ブルコトハ避ケルガ今迄檢査シタ十數例中著明ナ變化ヲ呈シタモノハ一例ノミデ他ハ認ム可キ變化ヲ示サナカッタ。何レコレニ就テハ多數ノ例ニツキ檢査シタ上デ改メテ報告スルコトニスルガ、上述ノ所見ニ徴スレバ外科的手術ハ通例「アレルギー」ニハ著シイ影響ヲ及ボサヌモノデア
ルカノヤウニ思ハレル。

第六、實驗的動物結核ニ及ボス大ナル外傷ノ影響

上述ノ諸事實ニヨリ大體人間ニ於ケル肺結核ガ外科的手術ニヨツテ如何ナル影響ヲ受クルカラ知り得タガ、次ニ動物ノ實驗的結核ニ及ボス大ナル外傷ノ影響ヲ檢シコレヲ參考ニセント企テタノデア
ル。

コノ研究ハ東大稻田内科デ鹽澤博士、北岡、井上兩學士ガ行ツタノデア
ルガ、始メ私ハ胸廓成形術ガ好成績ヲ呈スル理由ヲ考究スル一助ニスル目的デ、動物ニ胸廓成形術ニ於ケルガ如キ大ナル切創ヲ作り、肋骨ヲ切除スル代リニ唯切斷ニ止メテ大體ニ於テハ胸廓形成術ト同一デア
ルガ、唯胸廓ノ縮小ヲ起サセナイヤウニシテ、斯カル手術ガ動物ノ結核ニ如何ナル影響ヲ及ボスカヲ知ラント欲シタノデア
ル。然シ實際ニ當リ、斯カル手術ハ「モルモット」ニ於テハ困難ナコトヲ認メタノデ、「モルモット」ノ背部ニ脊柱カラ少シ離レ側方ニコレット並行ニ約七糎ノ長サニ皮膚及背筋ヲ切開シ、直ニ縫合シ或ハコレト同時ニ大腿骨ヲ折り又ハ單ニ骨折ヲ行ヒ、コレガ如何ナル影響ヲ實驗的動物結核ニ及ボスカヲ檢スルコトニシタ。

試驗動物トシテハ體重三五〇瓦内外ノ雄海狼ヲ選ビ、豫メ Römer 氏反應ヲ行ヒ動物ガ結核ニ罹テ居ラヌコトヲ確メ本試驗ニ著手スルコトニシタ。即傳研ノ佐藤秀三教授カラ分與サレタ強毒人型結核菌ヲ千分ノ一、百分ノ一又ハ十分ノ一既ツツ用ヒ、強弱種々ナル感染度ノ結核動物ヲ作り、前記外傷ノコレニ及ボス影響ヲ觀察シタ。外傷ハ菌接種一乃至二週前ニ加ヘタモノト、更ニ接種後三乃至七週後ニ今一度同様ナ外傷ヲ加ヘタモノトアル。ソノ詳細ハ他日前記諸氏カラ報告サル、筈デア
ルガ、大體ノ成績ヲ述ブレバ、佐藤教授ノ實驗方法ニ從ヒ、菌接種後約十週前後ニ於テ動物ヲ撲殺

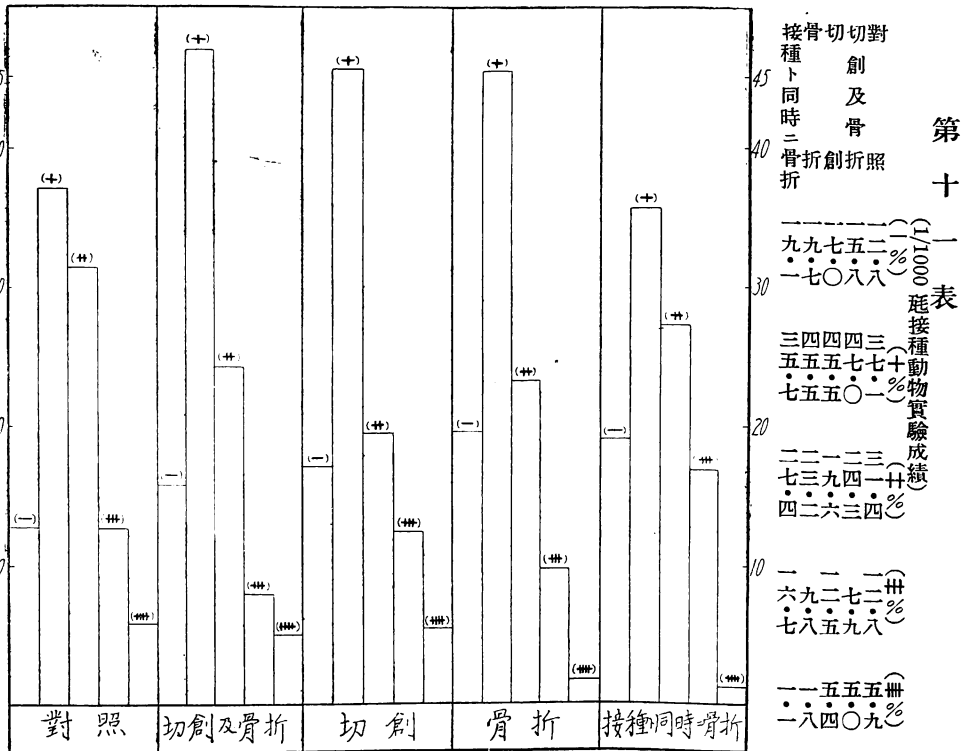
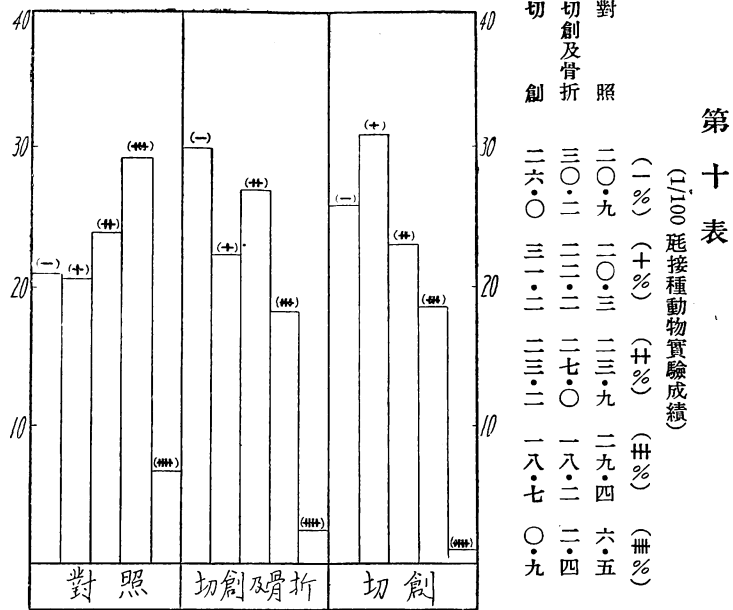
モルモツト 番	注	射											内			臟	
		右隣	左隣	右風綫	左風綫	右腋下	左腋下	前縱膈	後腹膜	門脈	氣管	肺	肝	腎	脾	脾ノ重サ	
2	十膿	卅	十	十	一	卅	一	十	十	卅	卅	十	卅	卅	卅	1.2	
3	卅膿	卅	十	卅	一	卅	一	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	2.15	
4	膿	卅	卅	卅	一	卅	一	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
5	膿	卅	卅	卅	一	卅	一	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.6	
6	ナソ	卅	一	卅	一	卅	一	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.3	
7	膿	卅	十	卅	一	卅	一	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.8	
8	ナソ	卅	卅	卅	十	卅	十	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
9	膿	卅	卅	卅	一	卅	十	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.95	
10	ナソ	卅	卅	卅	一	卅	十	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.5	
11	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.4	
12	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	十	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
14	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.2	
15	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.5	
16	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.2	
17	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.6	
18	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
19	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.2	
20	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.3	
21	ナソ	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.6	
22	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	2.0	
23	ナソ	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.8	
24	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.3	
25	膿	卅	卅	卅	十	卅	一	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	0.8	
26	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.7	
27	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
28	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	2.0	
29	膿	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.0	
30	ナソ	卅	卅	卅	十	卅	十	卅	十	卅	卅	卅	卅	卅	卅	1.3	

切創

切創及骨折

照

對



ル結締織ノ生成ガソノ何レニ多イカラ検査シタガ一日瞭然タル程ノ變化ハ認めラレナカッタ。
コノ研究ハ未ダ完成シタモノデハ無イガ、以上ノ實驗ニヨツテモ、實驗的動物結核ガ大ナル外科的所置ニヨリ惡影響ヲ受クルモノデ無イコトダケハ知り得ルノデアアル。

結論

既述ノ種々ナ場合ニ於ケル臨牀的觀察竝ニ動物實驗ノ成績ニ徴スレバ、身體ニ大ナル傷ヲツケルコトハ、ソレニヨツテ一時患者ノ榮養ヲ害スルニモ係ハラズ、ソレガ爲メ肺結核ノ進行ヲ速カナラシメ或ハ潜伏性結核ノ活動ヲ促スト云フガ如キコトハ稀デアツテ通例ハ無影響デアアル。故ニ肺結核患者ニ對シ、何等カノ外科的手術ヲ行フ必要ヲ生ジタ場合ニハ特殊ノ場合以外ニハ安心シテ手術ヲ行ツテヨイ。但シ早期浸潤ノ存在スル場合ニハ凡テノ刺戟ハ屢々有害ニ作用スルモノデアアルカラ、異種蛋白質注射ト同様ノ作用ヲ身體ニ及ボス外科的手術ガ有害ニ作用スルコトガ無イトハ云ヘヌ。稀ニ手術ガ有害ニ作用スルノハ或ハ斯カルモノニ手術ヲ行ツタ場合デアアルカモ知レヌ。然シコレニ關スル症例ヲ充分ニ有シテ居ラヌ以上、コレハ單ニ余ノ想像タルニ止マルガ、コノ點ハ將來注意シテ研究スル必要ガアルト思フ。兎ニ角今後ノ研究ニヨツテ、早期浸潤ヲ有スルモノニ對シテモ、手術ハ通例無影響ノモノデアアルカ或ハ然ラズシテ有害ナコトガ多イカ、決定サレル迄ハ、斯カル患者ニ對シテハ多少慎重ノ態度ヲ取ル方ガ安全デハ無イカト考ヘル。

次ニ胸廓成形術ハソノ治療成績ガ甚ダ良好デアリ又治療期間ヲ著シク短縮スル利益ガアルカラ、本邦ニ於テモ今後盛行フ可キ良法デアルト信ズル。但シコノ手術ノ成績ハ適應症ノ選擇ガ當ヲ得テ居ルカ否カニヨツテ著シク異ナルモノデアアルカラ、適應症ノ選擇ニハ特別ノ注意ヲ要スルノデアツテ、本療法ノ眞價ヲ發揮セシムル爲ニハ内外科醫ガ密接ニ協同スルト云フコトガ最モ大切ナル必要條件デアアル。

最後ニ一言ス可キハ吾人ノ調査シタ外科的手術ニ於テ使用サレタ麻醉藥ハ主トシテ「パントボン、スコポラミン」及「ノボカイン」等デアツテ、「エーテル」及「クロ、ホルム」ノ吸入ヲ行ツタモノハ例外的ノ少數デアツタコトデアアル。「エーテル」及「クロ、ホルム」ノ吸入ガ肺結核患者ニ對シ有害ニ作用スルコトハ以前カラ唱ヘラレテ居ル所デアリ、余モ亦コノ吸入

ノ爲増悪ヲ來タシタト思ハレル實例ニ遭遇シタコトモアルノデ、コレ等ノ吸入麻酔ヲ行ツテ手術シタ場合ノ成績ガ吾人ノ得タ上述ノ成績ト必ズシモ一致スルトハ考ヘナイ。ソノ差異ノ程度ハ不明デアアルガ多少不良デアルト想像サレル。從テ麻酔劑トシテ主トシテ「エーテル」及「クロロホルム」ノ吸入ガ使用サレタ時代ニハコレヲアマリ使用シナイ今日ヨリモ外科的手術ガ肺結核患者ニ對シ惡影響ヲ及ボス場合ノ多カツタコトモ可能デアリ、或ハコレガ現時一般ニ肺結核患者ニ對シ手術ヲ避ケル傾向ヲ生ジタ一因トナツテ居ルカモ知レヌ。(終)